

川上宏奨学金 研究結果報告書

〈助成研究題目〉

ニューメディアにおけるヘイト表現と被差別当事者の声
—ミス・コミュニケーションを巡って—

2019 年度川上宏奨学金をいただき、卒業論文「ニューメディアにおけるヘイト表現と被差別当事者の声 —ミス・コミュニケーションを巡って」を執筆することができた。論文の内容ならびに具体的な調査方法について報告を行う。

1. 卒業論文の要旨

本研究では、KH coder を用いたマスメディア報道の量的分析と、インタビュー調査を用いた被差別当事者の「語り」の分析を通して、ヘイトや差別を巡る現代社会の構造的問題をメディア論的観点より問題提起を行うことを目的とした。

第1章では、朝日新聞と読売新聞の全国紙2社における、過去32年分のヘイトと差別関連の報道傾向を追うことによって、ヘイトや差別の問題がマスメディア上でいかにして語られてきたか、もしくは、そもそも語られていないかを知るため、マスメディア側の「語り」に着目した。報道傾向の分析の結果、2社における横並び報道の傾向が見られたが、同時に報道感情は朝日新聞と読売新聞でそれぞれ特色がある可能性が見えてきた。

第2章では、日本国内に暮らしたことのあるミックス・ルーツら被差別当事者側の「語り」に着目するため、13名の方にインタビュー調査を行った。ヘイト問題に関する法整備や、社会構造の見直しに関する議論で置いていかれやすい当事者と、その思い、そしてヘイト問題が根強く残る現状に、どう対応しているのか、マスメディアでは焦点を当てられることの少ない当事者の語りに着目した。インタビューの結果、ステレオタイプやヘイトを向けられ続けることによって、コミュニケーションや対話そのものへの「諦め」といった感情が、当事者の中で広く共有されている現状が見えてきた。また、ヘイトを向けられる当事者と、非当事者の人々が共有する現実には、それぞれ大きな差異があることも見えてきた。これにより、コミュニケーションの齟齬が発生し、問題解決が平行線を辿っていると考えられる。

第3章では、1章や2章で明らかになったヘイトを巡る現代社会の事象を、メディア技術とヘイトの関係性の歴史の中に位置付け、先行研究を参照しながら、再考した。本章では、ナチスドイツのホロコーストとテューリア作戦を、計算機的一种であるパンチカードによって行われた「情報」としてのヘイト、そしてルワンダ虐殺を、マスメディア的一种であるラジオによって行われた「言葉」としてのヘイトとそれぞれ定義した。その上で、現代の日本社会におけるヘイトスピーチを、これらのヘイト形態が複合した、すなわち「言葉」によるヘイトと、「情報」によるヘイトが合わさった「ハイブリッド型」のヘイトとして位置づけ、検討した。複数の形態のヘイトが合わさったことにより、ヘイト問題の解決が難航して

いると考えられる。

以上の調査の結果、20世紀後半におけるマイノリティの権利保障をめぐる社会運動の活性化や、日本政府による「多文化政策」などによって、戦後の一時期には排除されてきた国内のマイノリティの人々の存在が再び「見える化」したと考えられる。こうしたマイノリティの権利保障に対し、一部のマジョリティが自身の権利が侵害されていると感じるようになり、ある種の「抵抗」として、排外主義や極右主義へと傾倒している可能性が示唆された。

さらに、インターネットの商業化によって、出版資本主義の時代においてマスメディアでは一方通行的であった情報流通のシステムが、ソーシャル・メディアなどを介して個人からも発信することが可能になり、情報流通の双方向性が登場した。これにより、「ヘイト」というデータを特定の個人に直接送ることや、大量のヘイトというデータをネット上に拡散させることが可能となった。これにより、インターネット上では、ヘイトの直接性という問題点が浮上した。

加えて、マスメディアの情報の「編集者 (Editor)」と「媒介者 (Mediator)」としての役割の機能不全の問題があると考えられる。マスメディアには、デスクといったデータの「校閲」や「編集」を担う機能があり、ある程度流通される情報のフィルタリングが行われる。また、マスメディアは情報の「媒介者」として情報源と読み手を繋ぐ機能を担っていた。しかし、現代ではこうした役割をソーシャル・メディアに取って変わられ、個人に合わせて予め情報が選別され、「見たいものだけを見る」ことが可能になったと言える。しかし、卒論研究で行ったインタビュー調査では、インターネットの登場によって、必ずしも単純に「見たくないものは見ない」で済むようになったとは言えない可能性が浮かび上がった。むしろ、今までマスメディアが主たる情報源の時には晒されることの少なかった直接的なヘイトが、インターネットの登場によってマスメディアという「フィルター」を介すことなくヘイトの発信者から、ヘイトを受ける当事者へと直接的に届くようになったと考えられる。

こうした様々な要因が複雑に交錯していることによって、現代の日本社会におけるヘイトの問題は解決の糸口が見つけられぬまま、收拾がつかなくなっている現状が見えた。

2. これからの研究について

引き続き、ニューメディアとヘイトを巡る社会問題について研究を行うため、学部卒業後は欧米圏の大学院に進学する予定である。進学後は、卒業論文で取り扱いきれなかった事象についての研究を行うため、内容分析などさらなる調査を通してメディアとヘイトの関係

性についてより深く研究し、現代社会のヘイトを巡る構造的問題に取り組む予定である。

3. 奨学金の主な用途

奨学金の使途を、ここに報告する。

- ① 文献費：小熊英二の著作『単一民族神話の起源』、『〈日本人〉の境界』などの参考文献
- ② 交通費ならびに資料代：研究分野と関連する講演会場への移動や資料代など
- ③ インタビュー協力者への謝礼品：お茶菓子といった謝礼品の購入など

奨学金は主に研究の参考にした文献、ならびに研究分野に関連した他大学や他機関の講演会などへの交通費や資料代に用いた。また、費用を奨学金より捻出して、本研究のインタビューに協力していただいた13名の方々にお礼の品をお渡しした。

4. 謝辞

この度、本研究を実施するにあたり奨学金を給付してくださいました故川上宏先生ならびにご遺族の皆様、研究指導をくださった新倉貴仁先生と標葉隆馬先生、資料収集に協力くださった大学資料室の皆様、研究を応援してくれた両親と妹、そして関係者の方々への深謝の意をここに表明致します。